



2011年3月27日(第141号)
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報:tk-koho@mxl.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

カトリック高松教区報

主な記事

- 2面 東北関東大震災お見舞い 司教館の窓から、右近巡礼 司祭黙想会
- 3面 ゆく人くる人、ひと、オペラ ナバロ神父巡礼
- 4面 医療のともしび、若い力 行事紹介

溝部司教が「道」について年頭書簡 反響相次ぐ

溝部司教は一月二十日付けで新求道共同体「道」に関して年頭書簡を発表したが、カトリック新聞が同書簡について報道。その後、カトリック司教協議会会長の池長潤大司教、岡田武夫大司教が相次いで同紙に「道」について意見や呼びかけを行い、「道」の問題がクローズアップされ注目されている。

問題解決へ対話望む

「道」自身が考察と反省を

二〇一一年一月十六日、二月二十七日付けのカトリック新聞で相次いで、日本カトリック司教協議会々長池長潤大司教は、ここに至った経緯と「本道の対話を望む」と題して「道」の人々へ呼びかけている。それによると日本のカトリック教会の現役の全ての教区司教が全員署名して「道」の創始者キコ・アルクエジヨ

氏は宛てて二〇一〇年六月十八日付けで書簡を送り、日本における「道」の活動の自粛を求めている。この書簡の内容に関してキコ氏側から何の回答もなく、突然日本の五人の司教(一名欠席)がローマに呼び出された。二〇一〇年十二月十三日のことである。その経過の中で、日本の司教たちは問題解決のために「道」と対話する用意があるとの意思を表した。しかし、本道の対話が成立するには一つの前提があるとも述べている。まず「道」が日本教会に残した傷を認めて、どのようにすれば日本教会に受け入れられるかを真剣に考えることだ。

二〇一一年二月十三日付けカトリック新聞「意見異見私見」欄では「道」の責任者チームに対し東京教区岡田大司教が具体的な提言を行ったが、その前に述べている言葉がある。「道」の過去三十年の活動の結果は決して成功しているとは言えませんが、道の存在は日本の教会、社会とうまく協調出来ていないので、日本での「道」には、或る期間活動を停止して考察と反省を行っていただき、その上で日本の教会と対話して頂く事が必要ではないかと私は考えています。「道」の指導者が日本の教会の指導者ではなくロー

司教の重大な決断

年頭書簡

溝部司教は一月二十日付けで「新求道共同体『道』に関して」と題する年頭書簡を発表した。その中で司教は教区内で問題になっている「道」に対し、「(パチカン) 特使が訪れて結論を出すまで、活動を一切しないでください」と命じた。

この決定は「道」に対する司教の大きな方針転換となった。このことはそうせずにはおれない状況が生じたからだった。昨年末、溝部司教は日本の三人の司教とともにローマに呼ばれ、教皇や国務長官ら高官と「道」について話し合いを持った。会議の詳細は司教書簡には書かれていないが、席上高官たちは「日本の司教たちがそろって『道』の活動を禁止することは大きな問題だ」と述べたという。さらに問題解決のため特使を派遣する方針が示された。

司教と共に教区の再生と一致を

「道」の活動中止 振り返り考える時

また「日本の司教がローマに呼ばれた」ということで、ネット上に世界中からの反響もあり、「この問題は高松教区または日本の教会だけの問題では

とを待っていたのです」と溝部司教は心境を述べる。しかし「待っている」状況の改善は見られなかった。「この問題はあくまで高松教区という地方教会の問題であり、高松教区で解決しないといけない」と決意を表す。結論として、こじれた教区の再生と一致のため、「道」の活動を中止。そして「いま」が「振り返り」に戻るよい時期だと判断したとする。教区民すべてが司教に従い、司教を中心にも考える時間を持つためだ。

「私はこれまで『道』の問題はなるべく静かに、あまり公にせず解決したいと努めてきました。『道』の人々が自ら自粛して司教に協力してくれるこ

の活動は、八〇年代に入り、今治、新

居浜、西条、松山などへ熱心な聖書研究会として広がりを見せ始めた。九〇年代になって「道」の教区立国際神学院設立が発表された頃から教区内でさまざまな混乱と対立が続いた。カトリック新聞は「道」の問題について高松教区の司教、信徒の声として「独自の典礼にもとづく土曜日ごとに行う感謝の祭儀による小教区での混乱、*自分たちの命令系統を何よりも優先するため、一般信徒と別行動をとるため教会の中に二つの組織がある*日本文化や風土を無視した楽器や大声で歌う葬儀の独特の典礼様式。*「道」への献金、または会計が不明瞭。など教区で起こっている現状を指摘する。(一月三十日付)

混乱や対立の中で二〇〇四年着任した溝部司教は「聖霊のもとらす一致」をかかげ教区の一歩を踏み出すという重たい十字架を担って歩み始められた。まず教区を動かす両輪となる司祭評議会、宣教司牧評議会を設置。広報、典礼、青少年宣教、生涯養成等の様々な教区委員会を設置して活動できる態勢を整えた。また教区四県に協力司牧徒の一致を促進する組織作りを進めた。また溝部司教は青少年活動の活性化を目指して「若者と聖書」講座を四県で継続して開くなどの他、日常の信徒養

成活動、列福された結城了雪神父を顕彰するシンポジウムを徳島で開催するなど着実に教区は明るさを取り戻してきた。教区での大きな動きとして「この問題が解決しない限り教区の一歩はない」と言われていた神学院問題にも着手し、何度モローマへ足を運び、パチカン高官との折衝を続け、閉鎖へ向けた道筋を付けた。二〇〇八年六月には神学院閉鎖が決まり、翌年三月廃校となった。語学力の優れた溝部司教でなければできなかったことであり、その苦勞は大抵のことではなかったはずだ。これで問題は鎮静化に向かっていたと思われていた。しかし、昨年末にローマに呼ばれた特使の派遣が示されたという。この状況へ対応した溝部司教の「道」の活動への決定も教区の平和を取り戻そうとする重たい決断だった。

はばたき

春とはいえ、まだ風が冷たいこの頃ですが、ある染色家の話によりまずと、この季の桜の木は、満開の花を咲かせるために、渾身の力を込めて、樹木全体に紅を溜めるそうです。そのために、ほんのりとしたうす紅色を樹木の姿全体にまとうようです。それを知ってから私は桜の樹が好きになりました。

◆万物は密かに開花を準備しているのです。私たちが間もなく四旬節です。祈りと沈黙のうち心の深部でイエス様と出会い、個人的に親密になり、復活祭に向けてイエス様の光をまとうことが出来れば幸いです。

◆教区のホームページで去年十二月二十日付けの「司教館の窓から」を拝読しますと、「今、教区は一致した教会をつくるために立ち上がっている。決して後戻りをしてはならない」とあります。司教様の今年に於ける決意がひしひしと伝わってまいります。

◆私が最近始めた連句では、「一歩もあとに帰る心なし」との心得を芭蕉が教えています。教会と連句に直接の関係はありませんが、心意気は同じように思われます。

◆目標を定め、それに向かって一人ひとりが力を尽くして一つの教会をつくり上げていくことが出来まますようにと祈っています。

丸尾 修

東北大地震 (3月11日)

東北関東大震災で被災された皆様へ
お見舞い申し上げます。

地震、津波で大きな被害
救援の義援金募ります

東北地方を中心に3月11日大地震が発生し、それに続く大津波の襲来で日本の史上かつてない壊滅的な被害となりました。死者、行方不明者は更に増えています。その上、福島原子力発電所も大きな影響を受け放射線漏れも起こっています。高松教区の信徒たちも未曾有の被害の大きさに驚きを感じ、心を痛めています。特に被害地の仙台教区(宮城、福島、岩手、青森)の司祭、修道者、信徒の皆様には兄弟としての心からのお見舞いの気持ちを表したいと思えます。溝部司教はさっそく教区民に「救援に立ち上がる時」ですと訴えています。

仙台教区も大きな被害

特に被害が大きかった仙台教区は溝部司教の前任地でありました。当時仙台教区現役の司教でありながら、高松教区の事情により転任して頂いた経緯があります。そのために仙台教区は2年もの空位状態となりました。「今こそ、キリストにおける兄弟としての仙台教区の救援に立ち上がる時です」と溝部司教は呼び掛けています。それが同教区への恩返しを具体的に示すことだと思えます。

高松教区では被災した仙台教区の為にも支援金を募ります。たくさんの方が出来るだけのお気持ちを寄せて下さるようお願いいたします。また、教区内の学校、幼稚園などの教育施設へも支援金を募っています。カトリック教育に携わる人たちも、今こそ兄弟としての連帯感を示すために具体的に行動することは大切だと勧めています。

津波によって家族もろとも押し流された被災地の現状は余りにも悲惨で、安否のわからない親族を捜し求めて悲嘆にくれる人たちもいます。瓦礫となった家屋や木材、車や船体、様々な家財道具や建築資材など、積重なった漂流物の撤去も続いています。テレビ画面に映る被災状況を見る時、現状回復はおろか復旧、復興までには気の遠くなるような時を要するよう思え、見ている私たちでも絶望感さえ覚えてしまいます。そんな中で寝具もなく、寒さに震え、飢えと渴きを訴えておられる沢山の被災者の皆様の心の傷はますます深くなっておられることでしょう。加えて、大きな揺れを伴う震度5もの頻繁な余震に怯える毎日が続いています。

カトリック教会は今まさに回心の時である四旬節を歩んでいます。苦しみのキリストと共に被災者の方々の哀しみ、苦しみに寄り添いながら、高松教区民の私たちも、出来るだけの精一杯の支援の輪を広げていきたいと思っています。

(高松教区広報委員会)

司教館の窓から
司教の心づき

司祭評議会で新求道共同体「道」に話題が及んだ。「道」が問題なのでなく、教区の一致を妨げる運動になっているところが問題なのだという。それは「道」だけでなく、全ての司祭、信徒にもかかわる問題でもあろう。今、教区は協力宣教を推進している。これは第二バチカン公会議の教えであり、日本教会の基本方針である。協力宣教を実施するためには、小教区の壁を乗り越えなければならぬ。司祭間に緊密な連絡と信頼関係が必要だし、しっかりと話し合っただんな教会をつくるかという共通の理解を持つことが大事だ。「道」の人びとの問題をきっかけに、教会のあり方をあらためて見直すことができたのは、恵みと言ってもいい。教会のあり方をもう一度しっかりと見直し、真に福音的な教会づくりを真剣に考える時が来ている。

教区司祭評議会と宣教司牧評議会
司教書簡の全面支持を決議

高松教区長溝部司教の新求道共同体「道」の問題に対応する年頭司教書簡発表に当たり、高松教区司祭評議会と宣教司牧評議会は書簡への全面的支持を決議した。これはとりもなおさず司教の教区司牧の両輪として司教を支える歩みがいよいよ確かなものになったことを裏づけるものとなった。

司祭、修道者、信徒が共に福音宣教司牧に当たる協力宣教司牧態勢を敷いて六年が経過した。その間、これまでの信徒組織であった信徒使徒職協議会像からの脱却は容易ではなく、宣教司牧協議会組織についての理解が曖昧であったともいえる。教区の大事なことは司教司祭に任せるといった或る意味、信徒としての責任を放棄してきたこれまでの歴史に「ピリオド」を打つ。ここに至るまで、信徒としての教区への責任に目覚めたともいえる。教区の重大な問題について信徒も口を開き、意見を述べ教区民全体で考え、解決していかねばとの思いが育ってきた結果だ。

教区の一一致と再生はそういう意味ではやっと緒に着いたところだともいえる。そして「道」の問題はこれを避けては決して一致と再生には辿りつけない課題でもある。

また今年には教区の現状をより希望と喜びに満ちたものとするために三年をかけた歩んだ集大成である秋の「宣教大会」を迎える年でもある。

三月五日、六日に拡大宣教司牧評議会が開催され、教区の一一致と再生へ向かったの活発な意見交換がなされた。これもこれからの教区の姿を先取りしたものと言えよう。



第二回 高松・広島教区司祭合同黙想会

神との出会いを求めて
北海道トランプストに集う

今回も広島教区の司祭方と2月21日~26日まで函館厳律シトー・男子トランプスト修道院で、基本的に午前3時45分読書課から始まるトランプストの祈りのスケジュールを共にし、吉元大修道院長の講話から「神との出会い」を求めながら大きな恵みの時を過ごした。

高山右近列福祈願巡礼団
埋葬地で右近の生涯を静かに黙想

溝部司教を団長とする「高山右近列福祈願式巡礼」マニラコースが二月二日から六日まで行われた。巡礼には溝部司教のほか京都教区の大塚喜直司教、四人の司祭、シスター、信徒ら総勢八十八人。高松教区から十三人が参加した。



二日にマニラ入り、さっそく市内の城壁都市を訪れ、右近が住んだ場所、埋葬された教会跡などを散策して右近をしのんだ。そのあと世界遺産でもあるサン・アウグスチン教会で列福を祈りながらミサにあずかった。

三日は「公式行事」が続いた。マニラ大聖堂で右近記念ミサに参列。司式した比カトリック教会の口サレス枢機卿は「ここは右近が祈りに来たところ。彼は最後まで主に従って生きた」と彼をたたえた。この後市内にある右近像の前



右近像の前で

で献花式があり、溝部司教がリム・マニラ市長とともに花束を捧げた。式には軍隊の兵士が整列、音楽隊が日本の楽曲を演奏する中で華やかに行われた。市長からは溝部司教に友好の市の鍵が渡された。夜のレセプションでは日比の交流もあった。

四日には右近の骨が埋葬されているケソン市の聖職者墓地を訪れた。溝部司教は巡礼者を前に「決して裏切らなかつた誠実に生きた人」「金に執着しない潔癖に生きた人」「一夫一婦制を守り、孫たちには信仰を伝え家庭を大切に生きた人」「為政者として弱い人、貧しい人に光を当てた人」である高山右近の生き方に学びましょうと呼びかけ静かな黙想のひと時を過ごした。サント・ドミンゴ教会では右近が持ってきたマリア像を安置してミサを捧げた。夜のマニラ湾クルーズではここで戦死した今泉芳純さん(郡中教会)のお父さんの冥福を祈り海へ花束が投げられた。五日は半数の人がセブ島まで足を伸ばし、比最古のサン・トニーニョ教会でミサを捧げ、高山右近の足跡をしのび列福を祈る実り多き巡礼の旅は終わった。

医療のともしび (25) 信徒の宣教的責任

年の始め、筆者は例年通り、東京の自宅(愛媛県八幡浜と東京)で子供らと正月を祝い、これも例年通り2日には2002年から始めた池袋ホームレス無料医療相談に向かった。この医療相談は、有志カトリック医師と看護師で「カトリック池袋医療班」を組織し、薬品管理や衣類支援に信者サポートを得、フランスコ会日本管区や東京教区城北協力体および下井草共同体、さらにピモナントなどから援助をえている。そして東京都NPO法人地球と隣のはっぴい空間池袋、通称「てのはし」(代表森川、2010年10月31日カトリック新聞道の司牧研修会記事参照)の第2・第4土曜日の炊き出し時の医療相談部門に協力している。年末年始は出稼ぎ労働者の多くが路上にでるため、その方々の支援を行うべく、「てのはし」は24時間の越冬活動を行い、医療相談は1週間毎日行っている。筆者は2日午後、食事配布や相談をその夕方に行う東池袋中央公園へ急いだ。東池袋1丁目8番地付近で道端に仰向けに倒れている老人と傍に立つ青年に出会った。家族ではない青年が不安げな様子だったので、「大丈夫ですか」と声をかけた。老人は顔面と末梢は蒼白、意識が朦朧とし声かけにも応答できない。うなりながら身もだえして、脈もとらせない。

1000円札をだし「タクシー・・・」という。聞けば「池袋へ・・・」と回答。家に帰ろうと、家族という言葉をもむけると背を向けた。命の危険が予測されたため、救急車を呼んだ。丁重な救急隊員の対応に感銘を受けた。かつて別の署の救急隊員に都度怒鳴られたことを思い出した。その間、第1発見者と第2の青年も歩み寄り心配してくれた。青年の一人は氏名も告げなかったが、この二人の真剣でさわやかな目を思い出し、年頭からすがすがしい気持ちになった。

2010年8月坂出市で行われたカトリック医師会主催医療関連学生セミナーで、8年間の医療相談の経緯を報告した(2010年9月15日カトリック新聞)。これまでの筆者らの調査からホームレスは家族との絆が薄い人ほど絶望感が強く、抑うつに陥りやすい。しかし、多くが上手に対人関係を築き、仕事上の問題を解決することが苦手なため、職と住と食を失い路上に出ることになった。ホームレスの約3割は軽度知的障害がある(2010年末、森川ら調査)。それでも中には仲間を作り、誇りを失わず、高い幸福感を維持する人もいる。どんな苦境にあっても人は幸福に生きる力があるのだとわかる。

貧困や挫折にある方々への奉仕は聖職者に依存してきた感がある。今日、豊かになった日本人にとって、身近にいるこれらの方々へのまなざしと行動は信徒の宣教的責任ではないだろうか。
香川大学 清水裕子(東京板橋・愛媛八幡浜教会)

教区スケジュール

- 4月
 3日(日) 四旬節第4主日
 4日(月) <山下悟師 命日>
 8日(金) 合同臨時司祭評議会・宣教司牧評議会13:00
 10日(日) 四旬節第5主日
 17日(日) 受難の祝日(枝の祝日)「世界青年の日」
 20日(水) 受難の水曜日 11:00聖香油祝別ミサ
 21日(木) 聖木曜日
 22日(金) 聖金曜日(大・小斎)「聖地献金」
 23日(土) 聖土曜日
 24日(日) 復活の主日
 29日(金) 昭和の日

「東北地方太平洋沖地震」 救援募金のお願い

高松教区でも救援義援金を募っています。多くの方のご協力をお願い致します。
 郵便振込
 振込番号：01650-7-13208
 加入者名：カトリック高松司教区
 尚、通信欄に必ず「地震津波救援金」と明記して下さい。

若い力

十二月十一日と十二日の二日間、高知県の「ほっと平山」に、教区の中高校生二十人が集まって、「いちばん大切なこと」について考えました。
 神父様のお話を聞いて分かったことをしたり、歌をうたったり、ゲームをしたりしました。ゲームや歌の時は皆で盛り上がり、分かち合の時は真剣に考えたり意見を言ったりしました。夜のフリータイムでは、皆それぞれたくさん人と話し、和気あいあいと過ごしました。私は、初めて出会った仲間と

「中高生の集い」に参加して

江ノ口教会 島田悠祈

すぐに仲良くなり、二日間をともに過ごせたことがうれしかったです。このつどいの間、私は何をしていたか、学校の友達との間では感じないような親近感を感じました。同じ神様を信じる私たちは見えない糸でつながっているような気がして、神様の家族とはこんなものなのかなと思いました。
 このつどいを通して、私の「いちばん大切なこと」は、「仲間がいる」と気付きました。クラスの仲間、部活の仲間、教会の仲間、家族という仲間。それぞれの仲間と過ごす時間は貴重で、それぞれの仲間としか味わえない気持ちがあります。私は当たり前のように仲間が当たり前に生きています。でもそれが当たり前すぎて、その大切



さや、幸せになかなか気付けずにはいませんでした。これからはこの幸せに感謝し、いつも忘れないように過ごしていきたいです。

「感謝の歌を歌おう！」 桜町教会学校



桜町教会学校では大体、月に一回「子どものミサ」を捧げている。朗読、時には答唱詩編も子どもが歌う。青年のバンドもあり、この日のミサは大変元気である。まだまだ改善していくところは残されているが、一月十六日(日)のこどものミサではこの聖体をいただくから、子どもたちが祭壇の右側で聖体拝領の感謝の歌を歌った。「主に愛されて」や「アーメン・アレルヤ！」といった曲をきれいに歌うことが出来た。勿論その前にギター伴奏の青年(高松松の青年)に練習してもらった。初めて会衆に向かって歌ったので、子どもたちは緊張気味であったが、これからも続けて行きたい。きつと自信も身につけ、大人の方がたにも喜んでいただき、何より子どもたちが聖体拝領の意味と感謝を学んで欲しいと願っている。

また教会学校保護者会も毎月一回開かれていますが、勿論今年もお母さんたちはキャンプやクリスマス会など色々とお手伝いをしてきてくださったが三年ほど前から毎月定期的に一回、主

日のミサ後に保護者会を開いている。神父様から子どもの信仰教育についてお話を聞いたり、行事の打ち合わせなどであるが、今年最初の集まりでは、恒例のイースター・テアトロのスケジュール、また三月のお別れ遠足、子どものゆるしの秘跡について、そして土曜学校のことについて活発な意見交換が行われた。特に土曜学校は桜町聖母幼稚園の卒園生を対象に行われてきたが、今後どのように充実させていくかについて、お母さんたちが本気で真剣に取り組み、積極的な意見を出してくださり、協力の可能性についても意見が出されたのはうれしいことであった。これは今後また話し合いを重ねて実現していき、子供たちが少しでも神様の愛を知り、みことばに触れる機会としていきたいと願っている。また今年からは従来のお別れ遠足に替えて四年生以上の小学生のための「長崎巡礼 2泊3日」を計画中である。長崎の方々の信仰に倣いたいとの思いでホームステイも予定されている。(実施日三月二十六日(二十八日の予定))

教会学校の課題の一つは国際部の子どもたちの教会学校参加の継続である。クリスマス会、キャンプには大勢の参加があるが、月に二回の英語ミサ前の教会学校への参加はいろいろな事情で参加継続が難しいと思われる。国際部の方との緊密な連絡とともに教会学校の内容充実研究が必要である。ご協力くださる方々を切に願っている。
 桜町教会 教会学校リーダー

映画紹介 [エクソシストの真実]

カトリック中央協議会広報推薦映画

「エクソシスト」とはカトリック教会の「悪魔祓い師」の事。2010年11月市民の高まる要求に応え、司教たちが招集された。その要求とは「悪魔祓い」である。

「我々は戦いに備える必要がある」
 2010年11月13日付
 -ニューヨークタイムズ紙-



前号パズルの答え

タ	ル	ソ	ス	ル	キ
カ	ロ	ア	ツ	シ	リ
カ	モ	レ		ス	ア
マ	ン	ク	ベ	ト	ロ
ウ	エ	サ	ウ		
コ	リ	ン			カ
ン		ド	ホ	サ	ナ
ヨ	ア	ロ	ン	ウ	
シ	ナ	イ	ス		ル

前号のパズルの正解は
 タカマツキョウクホウ

編集後記

高松教区では司教書簡が発表され本教区報で詳しく解説されています。また東北では巨大地震と津波の為に多くの尊い命と財産が奪われました。心よりお見舞い申し上げます。これを機に教区ホームページにおいて教区の様々な情報を発信できるように努めたいとします。
 百四十号紙上「教区民の集い」記事で文責者三氏の氏名が漏れていました。

- ・生田久美子(徳島地区)
 - ・丸尾 修(愛媛地区)
 - ・日向 育子(香川地区)
- お詫びとご報告を申し上げます。

一粒会パイプオルガンコンサート

演奏者 キム・ユンファン
 日時 五月二十一日十九時
 場所 桜町司教座聖堂
 五月二十二日十五時三十分
 場所 カトリック大学講堂

私たちは、自分を創造しようとするこどもを
 まなび、護りましょう

暁の星学園

- 鳴門聖母幼稚園 高知聖母幼稚園
- 阿南聖母幼稚園 海の星幼稚園



医療法人社団聖心会 阪本病院
 看護師・准看護師
 随時募集中です！
 院内保育園開設
 ご連絡をお待ちしています。
 連絡先(事務局)
 0120-770-315

神を観想し、
 その実りを人々に伝えよ
聖ドミニコ宣教修道女会